

大本營海軍報道部 編纂

海軍戰記

大東亞戦争と帝國海軍

海軍戰記



聖戦の大使命

海軍大臣 嶋田繁太郎

畏くも宣戦の大詔を拜しましてより、茲に一ヶ年を経過し、御稜威の下皇軍は連戦連勝隨處に敵を撃滅して多大の戦果を挙げ、皇國の武威今や太平洋、印度洋の全域を壓し、大東亞の建設着々として進捗しつゝありますことは洵に慶賀に堪えない所であります。

惟ひますに開戦以來獲得しました此の赫々たる大戦果により、わが戦略的地位

は、愈々不敗盤石のものと強化されつゝあるのですが、しかしこれを大東亞戦争の全戦局より観ますならば、現在までの作戦の進展は基礎的段階を固めたに過ぎないと考ふ可きでありまして、戦争完遂の努力は懸つて今後にと云はねばならないのであります。

申すまでもなく、大東亞戦争は、米英の利己的侵略による東亞の禍根を芟除し東亞の安定を確保すると共に、世界平和に貢献せんとする崇高なる肇國の大理想に立脚するものでありまして、かゝる鴻業を達成致しますには國民全員が堅強靱なる決意を以て、國家の總力戦を擧げて最後迄戦ひ抜き勝ち抜く事が必要であります。

畏くも宣戦の 大詔に

「朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戦ノ目的ヲ達成ス

ルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ」

と御示し遊ばされて居ります。

萬一にも、小成に安んじ、或は難きを避け、易きに就かんとするが如き考へが毛頭あつてはならないのであります。

陸に海に空に、雄渾なる作戦の展開されつゝある秋、大東亞戦争第一周年を迎えますことは、寔に感激新たなるを覺へるのでありますが、全國民は今こそ眞に聖戦の大使命に徹し、大勇猛心を振起して、これが完遂に邁進すべきであると信ずるのであります。

武力戦と思想戦

大本營海軍報道部長

海軍大佐 小 川 貫 爾

畏くも 宣戦の大詔 を拜しましてより、早くもこゝに満一周年を迎ふことに相成りました。

大戦勃發以來、皇軍は、陸に、海に、空に、眞に世界を震撼する大戦果を收め、武威大東亞を壓し、新秩序建設の偉業、着々その歩を進めつゝあります。これ遍に、大御稜威の然らしむるところであります。誠に恐懼感激に堪へないところであります。

しかし乍ら、此緒戦の大戦果も、頑敵米英を打倒して永久平和の確立、世界新秩

序建設といふ皇國の大業から考へますれば、今次戦争唯第一步を踏み出したに過ぎないのであります。

即ち、武力戦の第一段階を終つたに過ぎないのであります、今後における戦争こそ、軍民一體、國家總力戦の本體を示現するものであるといふことを知らなければなりません。

緒戦に敗れたりと雖も、米英はなほ必死の抗戦を續けて居ります。彼等はその豊富なる物資を唯一の恃みとして、懸命に反撃を企てつゝあります。彼等の物資的抗戦力は、侮り難きものがあるのであります、これを徹底的に撃碎して、再び起つ能はざるまでに屈服せしめるのでなければ、平和は期待されないであります。

そのためには、一億國民非常なる覺悟を以て、この決定戦を戦ひ抜かねばなりません。即ち、産業戦線においても、家庭においても、その他あらゆる分野において、すべての人が、その職場々々、持場々々において、奉公一心、献身的努力をな

し、戦争の目的達成に邁進しなければならぬと存するのであります。

われわれは、前途になほ多大の艱難と障碍の横はるものあることを知らなければなりません。その艱難障碍は、固より物心兩面に存することは申すまでもありません。

敵米英は、一面にその豊富を誇る物資を動員して反撃を計畫すると同時に、一面にその老獪なる思想戦の展開によつて内部攪亂を意圖しつつあるのであります。でありますから、今後における戦争は、武力戦と相並んでこの思想戦線において、最も激烈を極めることを覺悟し、何ものにも屈せざる日本魂の精髓を發揮することが、絶對的必須の條件であると思ふのであります。

最後の勝利は、疑ひもなく、絶對にわれらのものであります。この確信を形の上に具現して、證明するものは、一億國民の協力一體の姿でなければなりません。

われわれは、今次大戦劈頭における、あの嚴肅な感激と、非常の決意と、崇高な

心境とを、永久に持ちつゞけなければなりません。緒戦の赫々たる勝利に酔ふて、その嚴肅な感激を忘れ、決意を忘れ、今日已に安易を願ふといふやうなことは、斷じて許されないことであります。

大東亞戰爭滿一周年に方り、われわれは、過去一年の光輝ある戦績を回顧し、その感激を新たにして、大詔に御示し遊ばされた御聖旨を奉戴し、赤心一貫、盡忠報國の誠を致したいと存する次第であります。

完勝への建設戦

大本營海軍報道部課長

海軍大佐 平 出 英 夫

基礎的段階の確立

大東亞戦争は、開戦以來、御稜威の下、皇軍將兵の善謀勇戦により、赫々たる戦果をあげ、わが戦略的態勢は鐵壁の堅きを加へつゝあるのであるが、これを全戦局から大觀するならば、現在までの作戦の進展は、基礎的段階を固めたに過ぎないと云ふ可きであらう。

現に侮る可からざる物資力を有する敵國が、銳意戦力増強に努め、頽勢挽回を企圖しつゝある事實に鑑みても、眞に戦争完遂の努力は今後にありと云はねばならぬ。

いつたい米英の開戦前保有せる海軍力が、大打撃を受けてゐる現在恃みとするは彼等の誇る工業力による兵備の増強と、戦局の長期化に伴ふわが國の經濟的疲弊を待たんとするにあるは、明瞭なところであつて、こゝに經濟戦が武力戦の勝敗を決する重要な一要素として、積極的な意義を有することを看過してはならない。もとより今日のわが經濟力は、異常なる飛躍と變貌をとげ、かつ

て米英が「持たざる國」の名によつて、わが國の經濟的脆弱性を指摘した當時に比すれば、今昔の感があるのである。

殊に大東亞戰爭以來、英國の東亞侵略の牙城であつたシンガポール、或は日本の南方發展に對する強力なる防壁とアメリカが自負したフィリッピン等の、各戰略的要點の奪取、及びゴム、錫等の戰略物資の各寶庫の確保により、長期戰に對する戦力の蓄積擴充といふものが、着々進捗しつゝある實情にあるので、戦局が如何に長期に及ぼうとも、これに即應して益々わが實力を發揮し得る不敗の戰略態勢は、日一日と強化されつゝあるのである。

生産力確保の急務

しかしかゝる情況を以つて、戦局は既に武力戰の段階より經濟建設戰の段階に入つたかの如き錯覺に陥つてはならぬ。云ふまでもなく近代戰の特徵的性格は武力戰であると同時に建設戰である點にある。しかし大東亞戰における建設戰の現在の段階は、現に活潑に繼續されてゐる作戰に對應するための建設であるのであつて、戦力を蓄積し、增強するための建設であるといふところに主眼が置かれねばならぬ。

すなはち言葉を換へて云ふならば、近來喧傳される南方建設、或は國內諸産業の能力増進等何れも敵の戦力を可及的速かに、破摧殲滅して敵を屈伏せしむることが主體である。

現にアメリカは、その豊富なる資源をもつて、艦艇、飛行機の増勢に狂奔し、兵力の數にものを云はせてわれに對抗せんとしてゐるのであつて、われわれは、いやでも彼等の出鼻を挫き、徹底的にこれを撃滅して行かねばならぬのである。これがために戦力の一層の擴充強化が喫緊事であることは云ふまでもない。

わが海軍は今や東西南北各四千餘浬にわたる大防衛線、大作戦線を確保するとともに、敵必死の反撃を撃碎し、さらに進んで敵の一艦一艇と雖も、これを撃滅し盡さねばやまぬ不退轉の決意と、烈々たる戦闘精神に燃え立つてゐるのであるが、全國民も亦、敵屈伏の武力戦の完遂を期するためには、その背後にある生産力の確保、増大も亦不可缺の前提條件であるといふ認識に透徹し、戦争を戦ひ抜き、且つ勝ち抜く決意を、いよいよ鞏固にしなければならぬ。

「備へあるものは常に勝ち、備へなきものは必ず敗る」とは、既に云ひ古された言葉であるが、戦捷への鐵則を道破した箴言として、これを銘記するの要、今日より切實なるはないと痛感するのである。

輕視出來ぬ敵の生産力

勝つためには、敵を知らねばならぬ。ことにアメリカは過去の龐大なる蓄積資源を動員して必死の反撃を企圖しつゝあるのであつてその努力と實力を過小評價することは出来ない。いまアメリカの戦時生産状況の一端を検討し、敵を知る事によつて戦捷への覺悟を新にするの資としたいと思ふ。

まづ建艦情況を見るにアメリカは、口癖のやうにこゝ一兩年を出ずして數十隻の航空母艦を完成、數萬機の飛行機を充實しこれを以つてする對日反撃強行を誇稱し國民の士氣を鼓舞してゐる。アメリカが航空母艦、飛行機の建造生産に懸命の努力を傾倒してゐる事は戦力擴充の特徵的傾向であるが、大東亞戰勃發直後、航空豫算四十億ドルを追加し、戦艦を空母に改造するとか、或は設計を變更するもの合計十七隻、商船の改造二十隻、建造中の商船の設計替へするもの七十隻に上ると盛んに宣傳してゐる。如何にアメリカが空母を重視してゐるかを窺ふことが出來やう。

また飛行機については本年六萬臺、明年十二萬五千臺と呼號してゐるのであるが、昨年十二月頃月産二千四百臺と見られてゐたものが、本年五月には三千三百臺を生産し九月には約四千臺内外と推定されるに至つてゐる。かゝる數字は勿論額面通りに受取れないにしても、現に新鋭戦艦の竣工

を數ヶ月短縮するに成功してゐる點等よりしても、その眞剣さを知ることが出来る。

次に船舶の建造情况であるがルーズヴェルトは本年一月議會に教書を送り、本年度の商船建造目標を八百萬トンと決定、さらに明年度においては千五百萬トンに増加し得ると大見得を切つた現狀は如何と云ふに、最近米海軍委員副會長ヴィツカリーは「今年度の造船量八百萬トン實現は容易である。すでに六月中の新造船高は六十六隻、七十三萬千九百トンに上つた」と報告してゐる。同月の造船高はアメリカ參戰當時に比して四十五パーセント方の増加と云はれるが、同委員會は、その後さらに「七月中の新造船高は七十一隻に上つた」旨を報告してゐるのである。

すなはち今春日産一萬トン級のもの一隻を建造しつゝあつたものが、六月頃よりは一日二隻強となつた譯で船臺も現在三百五十臺内外と見られるが年末には四百臺見當に達するものと推定され本年末から明年初頭に至れば一日三隻建造が豫想されるのである。

かゝるアメリカの造船能力は、前世界大戰の實蹟よりしても、決して輕視を許されないのがある。

大東亞戰爭の使命

輸送力の確保が近代戰の重要なる特徴の一つであることは云ふまでもない。各國が競ふて相當量

の船舶の保有と、その増強に懸命の努力を傾倒しつつあるのは、決して故なしとしないのである。

國民はかゝる近代戰の特質に鑑み、艦艇の建造は元よりのこと、船舶の建造が武力戰を強力に推進する重要要件である點を深く認識し、さらに船舶の擴充によつて、延ひては物資の潤澤も期待し得ることに思ひを致し、これが擴充増強に國民的協力を要望して止まないものである。

武力戰を基礎づける生産戰の重要性については、既に述べた通りであるが、戰力擴充については艦船、飛行機の建造の外、乗組員、搭乗員の問題がある。アメリカにあつては、各大學の教程は急速に軍隊化されつつあり、學園三百年の歴史に嘗つてない異變と云はれるのであるが、高等學校にあつても、卒業生はどしどし飛行機搭乗員として大量的に訓練され、相當の成績を收めつつあるやうに見られるのである。

また「海軍婦人豫備軍」なるものが編成されるなど、自由と個人主義を生活の本領とするアメリカにあつて、彼等は今や急速に戰爭完遂のために、國家總力戰の態勢を強化し、利己的生活を犠牲とする全體主義體制を整へつつあるのである。

元より我が國にあつては、戰爭完遂の決意すでに固きものであるが、國民の生活態度において、戰爭完遂の協力において、まだまだ改善し、工夫し、徹底するの餘地多からうと考へられる